宗祇の『古今和歌集』講釈
――409「ほのぼのと」の和歌を中心にして――

小髙道子

東常縁から古今伝受を受けた宗祇は、三条西実隆・近衛尚通・肖柏に古今伝受を相伝した。これらの切紙を比較すると、宗祇から古今伝受を受けた三流でありながら、切紙の有無についてなど、それぞれの古今伝受において内容が異なることがわかる。当時の古今伝受は、門弟の能力・必要に応じて、その相伝内容を変えていたと推測される。

宗祇は古今伝受を相伝した三人以外にも、『古今和歌集』を講釈している。これらの講釈は門弟により異なっていたのであろうか。また、講釈と切紙との関係はどのようなものであったのだろうか。両角倉一氏は宗祇が多くの門弟に『古今和歌集』を講釈している事を明示された。[1] これらの講釈聞書には影印翻刻されているものも少なくない。本稿では409「ほのぼのと」の和歌に着目して、門弟による講釈内容の相違について検討を加えたい。

一　東常縁から宗祇への古今伝受

常縁から宗祇への古今伝受において行われた講釈の聞書が『古今和歌集両度聞書』である。宗祇が常縁の講釈を聞書したもので、宗祇が継承した『古今和歌集』の講釈内容を知る事が出来る。宗祇の門弟近衛尚通が書写した書を智仁親王が書写して宮内庁書陵部に伝わる。[2]

これは海路に我思人のおもむくを送てよめる歌也。明石の浦は所の道地也。たとへばあかしの浦より舟出してこぎいづる人の次第に遠ざかり行おりふし、霧のむら〳〵はる〳〵とたちて、ある時はかすいかになり、又はさやかにみゆる折ふしも侍り。猶みるまゝにしまがくれてはてぬるを、いまはいづくにか行やらん、いかやうにか成りぬらんなど、ひとかたならず思やるよし也。大方の旅の空さへあはれにも、かなしくも侍を、まして万里の波濤を思ふ人のこぎ別ゆかんを思やる心、いふかぎりなうあはれふかゝるべきにこそ。此歌、旅に入事、尤の奥義也。霧を病などいふは不用。此歌を当流に秘する事は、心詞とゝのほりて、しかも幽玄にたけたかく余情あれば也。歌道の大切不可過之、専可仰之とぞ。

二　三条西実隆・近衛尚通への古今伝受

実隆は「門弟随一」として、宗祇の古今伝受の全てを継承したとされる。しかしながら、実隆自身の講釈聞書は伝わらない。そこで、実隆から三条西家を経由して伝えられた実枝の講釈を細川幽斎が聞書した『伝心抄』の該当部分を記す。[3]

此歌他流ニハ色々ノ説アリ経信説ト云ハ
ホノ〳〵ハ最初伽羅藍ノ事也男女赤白ノ不合已然也明石ノ浦ト云ハ胎内ニ十月ヤトリテ五大ヲウクル所也朝霧ト云ハ本覚真如ノ無明ノ所也嶋カクレ行トハ生老病死ト云舟ヲシソハ舟ハ公界ヲ渡モノト云
当流ノ心ハ此集ニ入時ハ羈旅ノ哥也親句ノ中ニヲキテ匂ノ親句ノ哥也ヒゝキノ親句ト云事有ホノ〳〵ト明石ナトノ事也ホノ〳〵ハ幽玄体也明石トイハン枕詞也下ノ四句ハ五文字ノ注也時ヲイツトイヘハ秋ノ朝霧ノ言語同断ナルニ舟ヲ出シテ行体也此哥ニヲキテノ習ハ幽玄ニ長高体ノ詞コモリタル哥ト云也後ニ口伝アリト被語シナリ

三　肖柏への古今伝受（宗訊聞書）

肖柏自身の聞書は見られないが、肖柏が宗訊に行った講釈の聞書『古聞』が伝わる。[4]

二

此哥哀傷無常の心ありなと、様々のよそへある説、不用之、旅の哥に入たる心、奥義と云々、あひなれたる人の、旅にをもむくを、明石の浦にて送る時の様なるへし、はる〳〵と漕出る浪の上に、朝霧渡りて、ある時はかくれ、又はほのかにみえつゝ、次第〳〵にとをさかりて、奥津嶋なとにはやかくるゝをみれは、いつちへ漕ぎ行らん、いかに成行らん、なと思ひも捨すなかめたる躰なり、大かたの旅の別さへかなしきを、切に思ふ人お海路にわかるゝ時、尤思捨かたく物かなしかるへし、舩をしそ思ふ、とあるに、心をつけてみるへしとそ、此哥上品上生也と云々、幽玄にして有心也、又うるはしき躰あり、哥の道は、此躰に過へからすとそ、仍、特に執する哥也、切帋有と云々

四　宗碩への講釈

宗碩への講釈を宗碩が聞書した慶應義塾大学図書館蔵『宗碩自筆「古今和歌集」』が紹介された。[5]

是は海路に我おもふ人のおもむくを送てよめる哥也、明石の浦は〈霧をよめる〉所の道地也、たとへは、あかしのうらより切に思人の舟出して漕出るか、次第に遠さかり行おりふし、朝霧の村〳〵はるかに立て、ある時はほのみえ、ある時はさやかにみゆるか、猶みるまゝに嶋かくれはてたるを、今はいつくにか行らん、いかやうにか成ぬらん、なと、一かたならす思やるよし也、大かたの旅の空さへ、哀にもかなしくも侍るを、まして万里の波濤を

おもふ人の漕わかれゆかんを思やる心、いふかぎりなう哀れふかゝるへきにこそ、此哥旅に入事尤奥義也、霧を病なといへるは不用之、此哥を当流に秘する事は、心詞とゝのをりて、しかも幽玄にたけたかき余情あれは也、哥道の大切不可過之、可仰とそ、上品上生にをけるも其故也、是は親句の哥也

五　石井宗友への講釈

『鈷訓和歌集』として伝わる聞書が、石井宗友の聞書であることが考証された。同書の注は、左記のごとくである。(6)

浦の朝霧とは海路に我思ふ人のおもむくを送て読る哥也こき出るより次第〳〵とほの〳〵となる心也あかしの浦は所の道地也たとへは舟出して行人をしたふ心也霧の村〳〵立てある時はかすかになり又さやかにみゆる折も侍る猶みるまゝに嶋かくれはてぬるを今はいつくにかゆくらん、いかやうにか成ぬらん、なと一かたならす思やる由也大方の旅の空さへ哀にもかなしくも侍をまして万里の波崎を思ふ人の別ゆかんを思ひやる心限なう哀ふかゝるへきにこそ此哥旅に入こと尤の奥義也霧を病なと云ハ不用当流にハ秘する事心詞とゝのをりて、しかも優玄にたけたかく情あれは也哥道の大切不可過之専可仰之

これらの講釈聞書を比較すると、これらの聞書の間に大差がないことに気付く。三条西家を経由して伝受した細川幽斎の聞書には「他流ニハ色々ノ説アリ経信説ト云ハ」として他流の説を記しているが、「当流」として記された注は、他の注釈書とほぼ一致する。石神秀美氏は『玉伝深秘抄』をもとにしてこの和歌について様々な説が付け加えられたことを記されたが、そうした説は、宗祇の講釈においては用いられなかったようである。

また、宗祇から直接講釈を受けた宗碩の聞書が両度聞書と表記の相違を除いてほぼ一致する。両度聞書は、常縁の講釈を宗祇が聞書した書ではあるが、伝来する書の原本は近衛尚通筆であったとされる。三条西実枝から細川幽斎が古今伝受を受けた際には、講釈聞書を整理して師に提出して加証奥書を受けていたが、宗祇の時代には、あるいは自らの講釈聞書を整理することをせずに、両度聞書を書写していたのかもしれない。

中庄新川家蔵の『古今和歌集聞書』を検討すると明かな通り『古今和歌集』の講釈は、門弟ごとに行われ、師から弟子へと相伝を繰り返す過程で變化している。古今伝受について考察する際にはそれぞれの師弟関係念頭に置いて考察することが必要であろう。

注

（1）『連歌師宗祇の伝記的研究』（平29　勉誠出版）
（2）引用は片桐洋一『中世古今集注釈解題三』（昭56　赤尾照文堂）による。
（3）引用は『伝心抄』（平8　笠間書院）による。
（4）引用は『斯道文庫論集』（平1）による。
（5）引用は『斯道文庫論集』（昭60）による。
（6）引用は『鈷訓和謌集聞書』（平20　笠間書院）による。